



# 校長の戯言 ♪ No.20 (最終号) ♪ SEISHUKAN あ・ら・かると

20250321



鹿児島県立川薩清修館高等学校長 幸多優

## ■ 3年間の想い

2023年3月26日(土)に妻と二人で初めて入来を訪れた。入来峠を降りると川沿いに咲く満開の桜が新しい生活のスタートを祝ってくれた。新緑の山々に囲まれた川薩清修館高校では生徒たちが元気に部活動に取り組んでいる姿が見られ、校内には鮮やかな花が美しく咲き乱れていた。赴任が決まって下見に来た日である。

3月30日(水)には校務引継のために校長室を訪ねた。前校長と挨拶を交わしている際にPTA会長も前校長にお別れの挨拶のため来校していた。タイミングよく私も挨拶ができた。PTA会長は私の名刺をみて不思議そうな表情を見せたので、「珍しい苗字でしょう。私は徳之島の出身です。」するとPTA会長が「ワンマ、ダレン」(私もです)と笑顔を見せた。「松田さんということは、徳和瀬の出身ですね。」私は同級生の松田君を思い出し、話した。世間は狭い。松田君の従兄がこの川薩清修館高校のPTA会長ということで、思わず親近感をもってしまった。その夜、徳之島の松田君と電話で大笑いしてしまった。

4月1日(金)県庁で辞令交付式を終え、午後から川薩清修館高校の勤務が始まった。私がこの学校でできることは何か。音楽しかできない私は生徒たちの前で演奏する機会を探した。そこで定期考査も終わり、昼休みをのんびりと過ごしている時間を選び、サプライズで中庭ランチタイムコンサートを行った。生徒たちは何事かと、窓から覗いたり、渡り廊下まで飛び出してきたりして喜んでくれた。生徒の要望でクラスマッチにも参加させられ、無様な格好を見せた。蘭牟田池までの遠行では生徒に付き添ってもらい足を引きずって完走した。修学旅行では普段見せない生徒たちの屈託のない一面も見せられた。

生徒や職員、保護者とあらゆる学校行事を過ごしながら、あっという間に3年の月日が流れ、2025年3月31日をもって私は校長職を役職定年することとなる。

大学を卒業して私立高校に音楽教員として就職し、授業、部活動以外に生徒指導、生徒募集と大学では学ばなかった業務を必死になって覚えた20代であった。部活動では初めて取り組んだマーチングで九州大会にも出場した。その後、サクソフォン教育に目覚め、ヤマハと私立の音楽科講師を務めたが、公立学校の教員採用を目指し、30歳で特別支援学校に採用になった。学校以外での音楽活動が実を結びフランスに留学。それから母校の徳之島高校に赴任し、島の教育と音楽教育に8年間没頭した。高校再編整備で新設校の準備室にも勤務し、母校を再編する業務にも従事した。鹿児島玉龍高校に5年間勤務した後、みやまコンセールと宝山ホールに出向することとなった。鹿児島の文化振興に大きく関わった5年間であった。学校現場では経験できない、演奏会の企画・運営や接客業務に心が折れたことも度々あった。ここでの経験は後の管理職業務に大きく役に立つこととなった。

鹿児島東高校に3年、串木野高校に1年の4年間教頭職を務め、最後に川薩清修館高校で3年間校長職を務めた。法に守られ、法に縛られている教育界を改めて考えさせられた。今からの時代を生きていく若者を育てるために必要なことをこれから模索することが重要だと感じた。これまでお世話になった同僚をはじめ、多くの諸先輩・後輩に感謝しかない。

私の今年の目標はRe・Startである。4月から音楽教員として関わっていく上で多くの生徒たちとの出逢いが待っている。音楽教員だった12年前の自分とは違う自分が見つかるか?新しい時代の生徒たちと真摯に向き合い、考えさせる教育が私にできるか?ファシリテーターとしての役割を担えるか?心配なことが山ほどある。

多くの不安を抱えながら、この入来での3年間とお別れである。「校長の戯言」は今回のNo.20号で完結となる。これまでお付き合いいただき、ありがとうございました。